大日本帝国期の建築物が語る近代史　上水流久彦編

勉誠出版・3080円

今ある社会の変容映す

本書が語る「建築物」は単なる保存の対象ではない。日本の旧支配地などに今なお現存しつつ、その地の人々の価値観や歴史観を映し出すものだという。上水流久彦（県立広島大）を執筆者代表とする論集は「なるほど」と気付かせることの連続である。

韓国・浦項には「九龍浦日本人家屋通り」が今もある。中村八重（韓国外国語大）によると、観光化した韓国の近代建築物と対日意識の関係は極めて複雑だという。日本的なものを否定する「日本色批判」があるかと思うと、日本を意識しないでドラマロケ地になったことにひかれる「流行志向」があり、あえて日本的なものを追求する「日本コンテンツ志向」もある。

この通りの日常を中村はルポしていて、観光客が写真を撮りたがるロケ現場は神社の石段。中村は複数のグループに取材したが、過去にこだわる感想は少なく、木造建築について「情がある」「環境に優しい」といった回答が得られた。地元の文化解説士たちは「痕跡を残しておけばそれが（過去を）語ってくれる」と言い、むしろ再開発への動きを憂えていた。韓国民の意識をひとくくりにできないことがよく分かるだろう。

上水流は台湾の近代建築に触れ、親日的で日本統治期のものを大切にしている、という視点だけでは誤解を招くという。その分岐点は2005年の文化資産保存法改正だ。法の目的が当初の「中華文化の発揚」から「多元文化の発揚」へ改められ、日本統治期の歴史遺産も含まれることになる。いわば今の台湾社会の変容の証しとみていい。

終章は被爆建物の旧広島陸軍被服支廠と三池炭鉱によって繁栄した福岡県大牟田市の市庁舎本館の保存を巡る論考を収録している。東アジアの「帝国」の遺産への視点が、「帝国」内部の建築の議論に生かせるかもしれない。

また、沖縄戦で近代建築が焼失した那覇市を巡っては、近代が完全に忘却させられているという上水流の指摘も重要だろう。しかし、その指摘は「忘却させた側」に果たして通じているのかどうか、心もとない限りではある。

（佐田尾信作・客員特別編集委員）

(C)　中国新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。